

帰国報告①

～シカゴ日本人学校での取組を通して～

岩国市立灘中学校 教諭 金田 隆史

派遣先在外教育施設名 シカゴ日本人学校

1 シカゴ日本人学校について

アメリカのイリノイ州、ミシガン湖のほとりにあるアメリカ第3の都市といわれるシカゴ。そこから北西に約40km離れたアーリントンハイツという町にシカゴ日本人学校がある。小中合わせて約150人の子供達が在籍しており（同一建物内に、幼稚園も併設している）、校長以下13名の派遣教員と現地採用の教職員、合わせて約40名のスタッフで、子供達の教育を行っている。



シカゴ日本人学校

子供達は朝、スクールバスで登校し、1校時から6校時まで小学生45分、中学生50分の授業を受け、スクールバスで下校する。途中、家庭から持参した昼食をとり、昼休みはグラウンドに出て遊ぶ。小中合同で活動することも多く、英語教育が充実しているなどの特徴がある。年間の行事は、入学式から始まり、運動会や双葉フェスティバルと呼ばれる



授業の様子

文化祭、最後は卒業式など、日本で行っている基本的な行事を同様に行う。一方で、現地校との交流学习やトルネード避難訓練をはじめとして、アメリカだからこその特徴ある行事も多い。

そんなシカゴ日本人学校で3年間勤務させていただく中で、慣れない異国の地で学びながら、着実に成長していく多くの子供達に出会った。以下に、その中で私なりに感じた、子供達の成長を支えていた3つのものについて述べたい。

2 人と人とのつながり

転校生の多い学校であり、すべての子供にとって出会いと別れが身近である。他校から転校してきたり、他校へと転校していったりする児童生徒がいれば、その都度、下校前の



お別れの会

時間に全校生徒が集まり、歓迎やお別れの会を開く。お別れ会では中学部の代表者が音頭を取り、一人一人の名前を呼んで全校生徒でエールを送る。最後は教師も含めた全員とハイタッチでお別れ。こういった経験を通して人と人とのつながりをかみしめることが、送られる側、送る側の双方の子供達のその後の頑張りを



スクールバスの見送り

支えていく力になるように感じる。1日の終わり、下校時のお別れも大切にす。5台のバスに分かれて乗り込み、出発する際には、教職員はバスが見えなくなるまで大きく手を振り、バスの中の子供達もバスの中で手を振り返す。こういった場面からも、かかわりやつながりを大切にしようとする気持ちが育まれるように思う。ちなみに、アメリカでは法律上（州によっても若干異なるようであるが）、中学2年生くらいまでは、子供だけで外出したり、家で留守番をしたりすることができず、常に大人が子供を見守らなければいけない。そのような環境は、子供達が大人とのつながりを強く感じる一端を担っているようにも思う。

校外学習では現地の様々な人々とかかわることになる。子供達にとっては、異文化にふれる体験と一緒にあって、その出会いの一つ一つが思い出に残る特別なものになる。現地の小中学校との交流学习も行う。相手校を招待するものと相手校を訪問するものがあるが、こういった場面でもたくさんの出会いと別れがある。英語は通じるだ



交流学习でのお別れ

ろうか、どんなことをすれば相手に喜んでもらえるだろうかと、子供達もいろいろと考えて準備をする。そうやって迎える出会いは子供達にとって良い意味で刺激的で、そこから得るものも多い。学校外の日本人との出会いもある。中学部では日本企業を中心に職場見学を行うが、このような場では、日本を離れて活躍する魅力的なたくさんの日本人と出会う。

以上のように、学校生活の中で、出会うことやつながることの価値や意味を強く意識する場面が、とても多いように思う。

3 共に理解し合い、尊重し合う

人と人のがより良くつながるためには、共に理解し合い、尊重し合う態度が欠かせない。子供達の編入前の生活経験は様々である。シカゴに来るまで

ずっと日本に住んでいた子供であっても、住んでいた地域が違えば経験してきたことも異なる。また、日本人学校では、幼稚園児も含めると、年の差の離れた子供どうしが共にふれ合う機会が多いが、年齢が違えば考えることやできることも大きく違う。このような環境では、自分の考えや常識に固執したり、それを押し付けたりするのではなく、他者の立場や思いを尊重する姿勢が求められる。運動会の応援練習では、小学部の高学年と中学部のリーダーたちが、小学部の低学年の子供にも踊りを教える。試行錯誤をする中で、日頃の生活では気づかないいろいろな配慮や心遣いが必要なことを学んでいき、同時に小学部の低学年の子供たちが全力で取り組む姿に、上級生は良い意味で刺激を受ける。始業式や終業式では、様々な学年の子供達の代表が作文を発表し、全校集会では、教員が自らの経験に根ざした多様な話題を提供する。そのような場面でも、様々な価値にふれることができる。

美術館や博物館などの訪問、消防署などでの社会見学に加えて、現地校の子供達との交流学习等を通して、アメリカの文化に直にふれることができるとともに、その文化を背景にして生活をしてきたたくさんの人と出会うことができる。特に、交流活動では、小学生や中学生としての同じ立場で積極的にかかわり合い、相手の考え方に直にふれるなかで、尊重すべき多様な考え方があることを学ぶとともに、異なることを大切にしようとする態度を身につけていく。校内でも、小学部はハロウィンの集会を開き、ハロウィンの歴史についてネイティブの教員から学んだり、中学部では家庭科の調理実習で感謝祭の日に合わせて伝統的な七面鳥料理を作ったりするなど、アメリカの文化を学ぶ多くの機会に恵まれている。

相手のことや、相手の背負っている文化を知り、大切にしようとする姿勢は、自分たちを見つめ、自分たちの文化について学ぶとともに、それを相手に伝えることと切り離せないように思う。交流学习で現地校の生徒を招く場面では、和太鼓の演奏や書道、折り紙などの日本の文化を紹介した。昼食には、現地にある日



運動会の応援練習



現地校での昼食の購入



交流学习での盆踊り

系のスーパーで売られているおにぎりや菓子パンを紹介し、現地校の生徒に食べてもらったりする中で、これまで何気なく食べていた日本の食品についても改めて見つめ直すことができた。その他に、現地校の生徒と一緒に、日本でも踊られるアニメの盆踊りを踊ったこともある。アニメは現代の日本の文化の一つであ



合唱曲決めの話し合い

り、それと伝統的な盆踊りが融合しているところに目を向けることで、日本の文化について、幅広く、また深く考える機会になった。その他、小学部の七夕まつり、中学部がさまざまな行事で披露するよさこいソーランなど、日本の文化や日本らしさについて考える場面が多く設けてある。

4 コミュニケーション能力

お互いが理解し合い、尊重し合える関係を築くためには、コミュニケーションを図ることが欠かせない。日本人学校では、日本語によるコミュニケーションと英語によるコミュニケーションの両方が大切にされている。

子供達にとって、生活の中で日本語が話せるのは家庭か学校であり、日本語を話したいとい

う思いを強くしたり、日本語が話せるという安心感を味わったりする場面が少なくない。また、日本人学校に入学させる保護者の思いの一つに、母国語を大切にさせたいという気持ちがある。近い将来日本に戻り、日本で生活する子供達に、しっかりした日本語を読み取り、考え、表現する力をつけるのは、日本人学校に求められる大きな役割である。そのため、授業では、話し合い活動や表現活動を積極的に取り入れている。図書室



スキー教室

には日本の書物をそろえ、読書活動も大切にしている。3学期の初めには全校でつくる文集は、全校生徒、保護者みんなが目にする文章であり、何度も書き直すことで言葉に対する感性を磨くことができる。

アメリカである以上、当然のごとく英語によるコミュニケーション能力が求められ、その価値を実感できる場面が多い。交流学习で現地の子供達からアメリカの文化を教えてもらったり、現地の子供達に日本の文化を紹介したりする場面などは、英語での会話が必要になるが、英語が苦手であっても身振り手振りを交えながら積極的に言葉にしてみることで意思の疎通が生まれ、そこに喜びを感じるとともに、相互理解を深めていく子供達の姿を、幾

度となく目にした。水泳やスケート、スキーなどの授業を行っていたが、その際には、校外の施設に出かけて、現地のインストラクターの指導を英語で受ける。校外学習などの学校の活動の他、日常生活も含めて、現地の人とかかわる場面では英語でコミュニケーションを図る必要がある。

そのような英語のコミュニケーション能力を磨くために、英語教育にも力を入れている。保護者も、せっかくアメリカにいるのだから、日本人学校ではあっても英語の能力を身につけさせたいという強い思いをもっている。シカゴでは、小学生に週4時間、中学生に週5時間、英語の授業を行っている。習熟度別のクラス分けをするとともに、ネイティブの教員の授業では現地の教材を使うなどしながら、きめ細かな授業を進めている。

5 教職員にも求められる3つの力

人と人とのつながりが求められるのは、子供達に限ったものではない。着任教員の慣れない生活を職員みんなでサポートする。配偶者どうしも配偶者会をつくり、生活をサポートし合う。より良いつながりを築くための、お互いに理解し合い、尊重し合う姿勢も欠かせない。小中の教職員は、子供達の教育を校種の壁を越えて協力して行く。様々な都道府県から派遣される教員どうしは経験も異なることが多いが、だからこそ、お互いのかかわりの中で新たに知ること、学ぶことが多い。自分の経験に固執してしまうことなく、柔軟な発想で吸収し合うことが大切である。ちなみに、休日には、職員が家族どうしで集まり、交流を深めることも多かった。郷土料理を持ち寄って紹介し合ったり、日本のことについて話したり、アメリカ生活に関する情報を交換し合ったりする環境があったことは、とても素敵なことであった。そのようにしてお互いの理解を深めていくために、教員にもコミュニケーション能力が求められるのは言うまでもない。多様なバックグラウンドをもつ教員どうしが協力していくためには、積極的にコミュニケーションを図ることが欠かせない。これは、英語による現地の人々とのコミュニケーションも同様である。一歩外に出れば、英語が求められる。地域で提供されている英語教育のプログラムなどに参加して個人的に英語を勉強する教員も少なくなかった。

ちなみに、「子は親の鏡」と言われるが、個人的には、学校教育の場では「児童生徒は教師の鏡」であるように感じる。そのような意味でも、子供達同様に、私たち教職員が率先してコミュニケーションを図り、お互いを理解し、尊重し合いながら、人と人とのより良いつながりを生み出していく姿勢が大切であると実感した。



英語の授業

6 おわりに

日本の学校では、阿吽の呼吸や暗黙の了解で物事が進むことも少なくないが、海外ではそうはいかない。しかし、それこそが海外で学ぶことの良さではないだろうか。子どもたちは、状況を察して配慮するといった日本的な力に加えて、多様な人がいることを前提として、積極的にコミュニケーションをとりながら、相互に理解・尊重し合い、より良い関係を築く力を伸ばしていく。そういったことが効果的にできるのが海外にある日本人学校での学びの良さであると、3年間の経験の中で強く感じた。そこで学んだ子供達が、これからさらに進む、多様化・国際化の社会のなかで、大いに活躍してくれるものと信じている。